

企業の認知度は人材確保などの面で重要な要素。一方、一般消費者が社名を目にする機会の少ないB to Bの非鉄金属業界において、多くの企業が課題感を持つ領域でもある。J X金属もその1社だが、近年、同社への認知は同社が重要な活動拠点の一つとする茨城県東部・東央地域の中で高まりつつあるという。どのような広報戦略が地域での認知度向上に寄与しているのか、茨城に足を運び取材した。

(山口 大智)

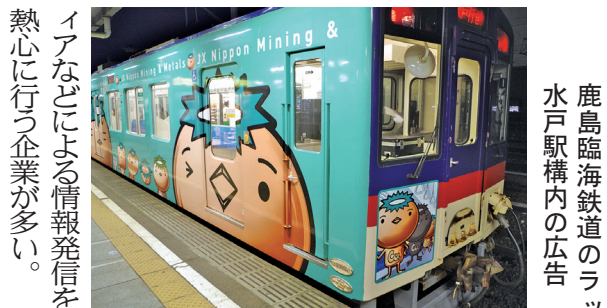
茨城県水戸市の競技場「ゲーズアンキスタジアム水戸」。一見、非鉄金属業界とは何の関係も無いように見えるこの場で、J X金属の名前が耳に聞こえてきたのは昨年4月30日のこと。この日は同社が昨年オフィシャルパートナー契約を締結した地元のプロサッカーチーム・水戸ホーリーホック(HH)のホーム戦で、同社のサンクスマッチ(社名を冠した試合)が開かれる日だった。

## J X金属 “深く刺さる” 広報戦略

試合前、競技場内にいた社員に向けて観客席から声が上がった。「新工場ができたら俺を雇ってくれー!」。よると、最近まで認知度は業界関係者であれば、同社そこまで高いと言えるものが茨城県内で新工場の建設ではなかったという。を進めていることを知っていてもおかしくはないが、声の主はHHのユニフォームを着たサポーターだった。

### 数度の社名変更 認知度に課題も

他の観客席に目を移すと、横断幕には手書きで同社マスケットキャラクターの「カッパーくん」が描かれていた。「カッパーくん」が描かれていたのは、「末永くドゥぞよろしく」の文字が。「ドゥぞ」の「ドゥ」が片仮名なのは、カッパーくん特有の言い回しだ。これまで下がついていなかった「内輪ネタ」が飛び出すまでに、サポーターからの同社への共感や親近感が深まっていたと言えらる。



鹿島臨海鉄道のラッピング車両①、水戸駅構内の広告

### 新工場建設 人材確保へ

その理由の一つに、同社が現在のJ X金属という社名となるまで度重なる社名変更を行ってきたことが挙げられる。社名変更を繰り返していった結果、認知度が低下しているほか、「末永くドゥぞよろしく」の文字が、もし同社が消費者向けビジネスであれば、認知度はそこそこある。名が製品と共設を進めている。ひたすら熱心に行う企業が多い。



水戸ホーリーホックのユニフォームを着たカッパーくん人形とファン

同社では、現在ひたすら市や日立市で先端素材分野を中心とした新工場の建設を進めている。ひたすら熱心に行う企業が多い。大規模な人数を確保する必要があり認知度の拡大は重要課題の一つとなっている。また、新工場を含め茨城県内に多く従業員が生活していることから、県内に情報発信を行うおけるプレゼンス強化は、従業員へのエンゲージメント向上にもつながるものだと見込みだ。裏を返せば、大規模な人数を確保する必要があり認知度の拡大は重要課題の一つとなっている。

## 地域住民からの認知・共感を獲得

### 地域共生目指し 水戸HHと契約

では、どのようにして同社は地域社会からの共感や理解を獲得していったのか。広告効果を正確に計測することは困難だが、一つの大きな契機となったのは、冒頭で紹介したプロサッカーチーム・水戸HHとのパートナー契約だった。同社はみる。水戸HHは地域社会に深く根付いたチームであり、サポーターとの距離も非常に近い。積極的な情報発信にも助けられ、サポーターとの距離感が急速に近づいていったという。

水戸HHの小島耕社長へのインタビューを通じて、J X金属の具体的な活動の詳細を探る。



## 茨城に広告集中投入

### スポーツ広告によるPRの鍵

「理由の一つにサポーターから強い関心を向けられたのはなぜでしょうか。」

「理由の一つにサポーターも受け入れやすかったのだろう。」

「ただ、同じ仲間であるJ X金属を応援した」とサポーターが思う。

「新しい原風景をこの街に」というブランドプロミスを掲げ、地域の活性化を活動の目的としており、この共通部分があったことが大きかったと思う。最初はなぜB to B企業がパートナーになったのかというところに対して疑問を持つ人もいたが、



同じ理念を持ったパートナー企業が一緒になってクラブを応援するというストーリー性があり、サポーターも受け入れやすかったのだろう。「ただ、同じ仲間であるJ X金属を応援した」とサポーターが思う。

### 企業理念一致、感動の共有が仲間意識育む

「J X金属が当クラブを非常に熱心に応援してくれている点も大きい。当クラブにとっても大きな課題の一つがファンを増やし、より地域社会に根付いていくことであるが、これはJ X金属をはじめとして当社を支援してくれるパートナー企業のためになるものだ。昨シーズンには茨城県の東北6市町を新たにホームタウンに追加した。この地域での活動を強化してさらにファンを増やし、J X金属と地域社会との架け橋となれば幸いだ。」

「今やJ X金属とは一蓮托生の仲だと感じている。当クラブにとっての大きな課題の一つがファンを増やし、より地域社会に根付いていくことであるが、これはJ X金属をはじめとして当社を支援してくれるパートナー企業のためになるものだ。昨シーズンには茨城県の東北6市町を新たにホームタウンに追加した。この地域での活動を強化してさらにファンを増やし、J X金属と地域社会との架け橋となれば幸いだ。」

